

あばっさ vol.14

アウラ族の精霊

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL : 03-5481-1912 FAX : 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com www.rainforestjp.com

HOW TO HELP
 <年会費>大人: ¥5,000 18歳未満: ¥3,000
 ・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体
 * 通信欄には「会費」または「寄付」とご明記ください。
 ・三井住友銀行 東京中央支店
 (普)7066247 熱帯森林保護団体
 * 銀行からお振込の方は、
 お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせください。



ケワルピ祭りの準備



カマユラ族の村の夕焼け



ボディーペインティングを覗き見

29回目、約40日のアマゾン視察を無事終え、7月末日本に戻りました。他国の支援活動を行う大変さは、まず入国手続きから始まります。ブラジルの特別なビザを取るためには、FUNAI (国立先住民基金: 法務省管轄) の許可証、戸籍抄本、無犯罪証明証、航空券が必要です。FUNAIの許可証取得には、黄熱病接種、正式な健康診断書等も準備し、全て揃い出国。そしてブラジルに入ってから、連邦警察に行き特別な許可書を得なければなりません。私たちが行っているアマゾン自然保護、インディオ存続支援活動の全てはガラス張りになっているわけです。ある種の条件の中での支援活動に、時としてストレスも掛かりますが、他国支援という事は内政干渉をせずに実施するものなのだと痛感しています。

サンパウロでジャングル暮らしの準備を整え、支援対象地域シンガーに出発！セスナ機で飛び立ってすぐ眼下に広がる開発で整備された大豆畑や牧場。その景色がシンガーに近づくにつれ緑の世界へと変わっていきます。この時ほど、「アー、良かった、まだ緑が残っている」と実感します。

カマユラ族の集落に到着。知った顔、顔、笑顔。まるで故郷に戻ってきたかのような心がスーと解れ、幸せな気持ちになり、シンガー独自のサッペという茅に似た植物で覆った大きな家マローカにハンモックを吊り、遠路はるばる辿り着いた身体を休めると、異次元にきたような感覚になります。昼は50°を越す暑さ、夜は10°近くになる過酷な環境ですが、厳しさはあっても辛さを感じません。熱中症になる人も皆無です。カマユラ村はシンガーの偉大なる族長タクマが昨年亡くなり、その盛大なクアルピ(死者を弔う儀式)の準備で大忙しでしたが、養蜂事業は着々と効果を出し、女性の自立事業である、共同畑事業も、個々のマンジオカ畑が害虫で全滅した時も、この畑で収穫した芋は無事だったので、村人が救われたという話を聞きました。この二つの事業は今後も継続していきます。来年はシンガー地域7カ所で実施している養蜂事業の研修を、この村で5日間に渡り実施予定しています。ワウラ族、イアラピチ族の集落訪問を後にカヤボ族エリア、ピアラスへと移りました。カヤボ族を中心に、自然発火防止事業を開始し、その贈呈式、消火訓練等に参加するためです。ラオーニもこの場を訪れ、大層この事業開始に喜んでいました。年々森の減少と比例するように拡大する自然発火は深刻な問題で、特に森を壊した後の赤茶けた大地の下には常に火種が潜んでいるような状況下、この事業は火種を絶つ事や、GPSで発見した火元をいち早く見つけ、大火になる前に消火します。今回は器材と人材を14カ所に配備しました。私も消火訓練に参加し、初めて原生林に入りましたが、森の中は自然の法則に従い、神々しくもあり、脅威すら感じました。訓練指導者、マトグロッソ消防署員のウィルソン、そしてインディオの人たち、森の前線で真剣に命がけで森を守ろうとしている名も無き人たちの努力があってこそ、広大なジャングルを守れることを目の当たりにし、ささやかでも意義ある支援を続けていく決意が一層強くなりました。同時に熱帯林破壊の原因が、先進国に暮らす私たちの営みを支えているという図式が浮かび上がり、今一度、私たちの生活を省みる必要性を感じました。

ヒョウとの出会いを気にしながらの夜の用足し。原生林で枝を折りその水の美味しかった事。様々な出来事が頭の中を巡ります。一日も倒れずに動けたことは沢山の方々の頑張れエールのおかげです。はにかみ屋だった少年ホッキが、凛々しくおじいさんのタクマの名を継ぎ、次世代のリーダーとして育っていくことを期待し、私も尚一層、支援活動に精進して参ります。(南 研子)

※一身上都合により、スタッフ白石ゆづりは当団体を退職し、長崎へ、ご苦労さまでした。

アマゾンの森の蜂蜜
販売中
170g 3,500円
(送料別) 100g
森の民 シンガー インディオ 特製



今回の蜂蜜は6月に咲くこの花の蜜です。



養蜂作業の様子(カマユラ族)

- 今回は、お一人様1個までの50個限定販売です。売り切れ次第、販売を終了します。
- ご購入ご希望の方は、お名前、ご住所、電話番号をご記入の上、以下の連絡先へお申込みください。

メール: xingu@rainforestjp.com
FAX: 03-5481-1913

これまで外部協力者の立場で折々にRFJの活動に関わってきましたが、今回はじめてアマゾン視察に同行する機会をいただきました。プロジェクトアシスタントとして、また通訳者として、事業実施地の村々を訪ね歩いて見てきたこと、感じたことをご報告します。

森を知りつくす彼らにしかできない活動 【インディオ消防団養成プロジェクト】

シンゲー河中流域にくらすカヤボ族の人々と今年始めたこのプロジェクトでは、マツグロツソ州消防署職員の協力を得て森林火災の防止・消火技術の講習を行い、消防団を組織します。消防車などない、あったとしても道がないジャングルでの消火方法は、周囲のやぶを刈り払って延焼を阻止することにつきます。今回、ナタヤクワ、背負い式の消火用水タンク、パトロール用のボート、バイクなどの物資を支援。さっそくそれらを使って、原生林内と草地での消火訓練を行いました。

道なき森の中を迷わずに歩き、飲み水や食べ物もその場で調達できる知恵を持つインディオの人たち。火災現場にいち早く駆けつけて火を消し、また普段から森をパトロールして回れるのは彼らしかいません。森の中での彼らの生き生きした身のこなしには、本当に目を見張られました。

いま現地では国立公園の境界ぎりぎりまで開発が進み、周囲には木一本ない広大な農場や牧場が広がっています。乾季にまわりから吹き込む乾いた熱風によって自然発火や延焼の危険が増していると共に、不法侵入する木材伐採業者や金探掘業者、密猟者、密漁者の火の不始末や放火の問題も深刻です。インディオ消防団によるパトロール活動は、そのような不法侵入の抑止にもつながることから、継続した支援が求められています。



事業の説明を聞くらオーニ



今回支援した消火用13mのボートと機材等一式



村のまわりの草地で消火訓練

ハチミツの生産が順調に増えています 【養蜂プロジェクト】

シンゲー河上流域の7民族と実施している養蜂プロジェクトでは、今回、カマユラ、イアラピチ、ワウラの各民族の村を訪ねました。ちょうど季節は蜜源となる花が豊かな乾季。森の中でハチがせっせと集めてきたミツが箱の中にたっぷりたまっていました。各村のメンバーは、これからも順調に群れを増やしてハチミツの生産性を高めていきたいと張り切っていました。

年に数回、技術指導で現地に入ってもらっているブラジル人養蜂専門家とも合流し、メンバーと共に会合を持ちました。養蜂技術向上のための合同研修会の実施や、作業小屋の大規模修繕、商品化に向けての準備などが今後の課題です。

村にも少しずつ貨幣経済が入り込んでいます。まちへ雇われ仕事の出稼ぎに出ることなく、彼らが主体的に、しかも森のめぐみを生かす形で現金収入を得ていく手段が必要とされています。その意味でも、村では養蜂プロジェクトへの期待がさらに高まっています。



カマユラ村の養蜂チームと一緒に



巣箱の中をチェック(カマユラ村)



女性の働きが村の生活をささえている 【女性の共同畑プロジェクト】



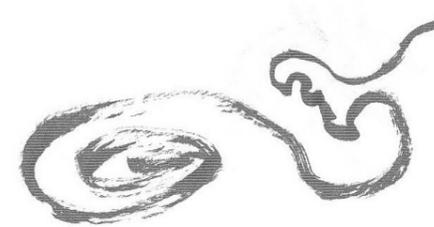
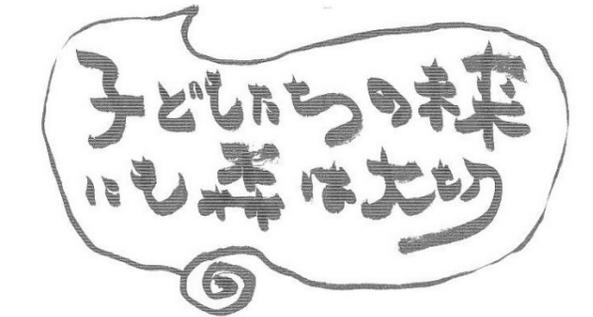
共同畑でマンジオカを収穫



女性会議

カマユラ村の女性たちの共同畑では、マンジオカ(キャッサバ芋)の収穫が最盛期を迎えていました。収穫した芋はすぐに皮を剥いてすりおろし、絞り汁からでんぷんを採り、それを乾燥させて保存します。共同畑の収穫物は、祭りの際のふるまいや村内にある学校の給食、他の村との物々交換の手段などに役立てられています。

日々、畑を作り、食べものを準備し、子どもを産み、育て、工芸品を作り…女の人たちは本当に働き者です。日ごろは対外的な交渉事など表に出る場面の少ない女性たちですが、実は村のくらしは彼女たちの働きが支えています。メンバーの会合で活発に意見交換するようすを見ながら、このプロジェクトが畑づくりに留まらず、女性のエンパワメント=ひとづくりに役立っていることを実感しました。なお会合では、畑の拡充に向けて、農機具類の追加支援要望が出ていました。



「森が無くなれば砂漠になる」を実感

村の中や道が付いた所など、木がない場所の地面は、まるで海の砂浜のような乾き切った砂でした。支援対象地であるシンゲー・インディオ国立公園が位置するアマゾン熱帯林南部の土壌は、やせた砂質土でできています。今回はじめて現地を訪れて、「森が無くなれば文字通り砂漠になる」ということを肌身で実感しました。そして旅を終えて我が家に戻ったとき、湿潤温暖な日本の里山の土壌の豊かさにあらためて感じ入りました。

私は10年前に東京から千葉県南部の過疎のむらに移住したのですが、ここに限らず日本各地の農村で今、耕作放棄地が広がっています。「安さ」追求のもとで、自国の豊かな土壌のめぐみは生かされることなく荒れるがままに放置され、遠い国の森を破壊してつくられた食料が大量に輸入されている——こんなことをしている場合ではないはず、と強く思ったアマゾンの旅でした。

Photos: Satomi Shimogo